

# メトッド・イメディアット (イミディアット・メソッド) 式授業の実践 ——学習者に主体性を持たせるための試み——

瓜 生 濃 世

## 要 旨

メトッド・イメディアット (イミディアット・メソッド) は、コミュニケーション能力の養成に主眼を置いた教授法である。この教授法は1990年代後半に大阪大学のフランス人教師によって考案され、その後教科書の出版を機に、主にネイティブの教師によって広く実践されるようになった。2007年の時点でフランス語、ドイツ語、英語そして日本語の教科書が出版されている。本論では、2003年度から2005年度に筆者が行ったメトッド・イメディアット式フランス語クラスでの経験を紹介するとともに、この教授法がもたらす効果について考察する。筆者は、毎回授業内で学習者全員に「会話テスト」を実施したのだが、このテストの存在によって、外国語に苦手意識を持つ学習者もフランス語学習に主体的に取り組む様子が見受けられた。授業を運営するにあたって実際に行った様々な工夫とその狙いを説明し、メトッド・イメディアットの発想を応用することでクラスを活性化させる方法も提案したい。

キーワード：フランス語教育、メトッド・イメディアット、イミディアット・メソッド、コミュニケーション・アプローチ、動機づけ

## はじめに

メトッド・イメディアット (イミディアット・メソッド)<sup>1)</sup> は、1990年代後半に大阪大学のフランス人教師が中心となって考え出された、コミュニケーション能力の養成に主眼を置いた教授法である<sup>2)</sup>。その後、主にネイティブの教師たちによって発展したこの教授法は次第に広く実践されるようになり、2007年の時点でこの教授法に基づいたフランス語、ドイツ語、英語そして日本語の教科書が出版されている<sup>3)</sup>。しかし、学会や研究会等で幾度となく紹介されたものの、メトッド・イメディアットの一般的な知名度はまだ十分に高いとは言えないであろう。筆者は2003年度から三年間、大学と短期大学の初習者を対象としたクラスにおいてメトッド・イメディアットを用いたフランス語の授業を行う機会に恵まれたが<sup>4)</sup>、目標に応じた柔軟性ある授業運営が可能であり、学習者にとっても非常に有益な教授法であるという印象を抱いた。というのも、従来の発想とは全く異なった授業活動が展開でき、学生に主体的に取り組む姿勢が見られたからである。

近年、大学における外国語教育が大幅な方向転換を迫られてきたことは周知の事実である。文法訳読法に代表される伝統的な教授法は姿を消し始め、より実用的な語学力養成を目指し、

コミュニケーション・アプローチが広く取り入れられるようになった<sup>5)</sup>。さらに動機付けの研究など学習者の情動面に関する新たなアプローチも試みられ、多くの教師は現場で日々新しい工夫をこらしている<sup>6)</sup>。そうしたなか、英語以外の第二外国語教育をめぐる状況は混迷を続ける一方であると言わざるをえない。英語が重要視される傾向はいつそう強まり、第二外国語不要論が唱えられ、必修科目から除外対象とされたり、またクラス数削減といった処置が取られる場合もある。特に長らく第二外国語の代名詞であったフランス語やドイツ語に関して言えば、アジア系言語の台頭によって履修者数が激減するなど、容易には解決し難い問題が山積みである。さらに言えば、大学における学習者たちの資質も大きく様変わりし、従来の対応では授業の運営が難しい場面も増えてきているように思われる。

筆者は、メソッド・イメディアット式教科書の編集に偶然携わったことをきっかけにこの教授法に関心を持ち、手探りのまま授業を開始したのだが、そこで学生たちの予想以上の好反応を目にし、その経験を通じて以下のように思い至った。それは、どのような動機からであれ、多少なりとも興味を抱いてフランス語を選択したであろう履修者たちに対しては、少しでも彼らの期待にこたえるよう「即効性」のある授業を行い、あくまでも「幸福なフランス語体験」をさせることが重要ではないか、ということである。具体的に言えば、拙いながらもフランス語でコミュニケーションをとる経験を与えることである。とりわけ外国語学習に苦手意識を抱いている学習者の場合、こうした発想が重要ではないだろうか。学習能力が高く強い意欲を持つ学習者ならば、「読む・書く・聞く・話す」という総合的能力を伸ばすことを視野に入れ、文法を体系的に学ぶことを厭わないであろう。しかし品詞や文型などの概念もおぼつかない学習者にとっては、文法用語を頻繁に用いる説明を理解することに困難を覚えてしまう。筆者は、メソッド・イメディアットを導入し、学習内容を大胆に絞ることでフランス語に対する学習者の心理的負担を減らすことに焦点をあてた。具体的には、授業目標を「フランス語でコミュニケーションをとろうとする姿勢を持つこと」と定めたのだが、この方針が学習者たちの主体性を養うのに有効であると感じた。またこうした口頭での作業を重視する授業は、ともすれば内容が乏しいという批判を受けることが多いが、筆者の経験では「会話しようとする」という意欲的な姿勢を起点に、学習者たちの様々な関心呼び起こすことができたように思われる。

本論では、最初にメソッド・イメディアットの基本的理念を確認し、次に授業をする上で筆者が実際に用いた様々な工夫とその狙いを述べたい。最後に、アンケートに書かれた学習者たちの意見や反応<sup>7)</sup>を紹介すると共に、この教授法の発展性について考察したい。

## 1. メソッド・イメディアット（イミディアット・メソッド）とは

### 1.1 メソッド・イメディアットの特徴—「会話テスト」中心の授業

メソッド・イメディアットをテーマに編纂された大阪大学の論集の序論（2002）では、メ

トッド・イメディアットは「目標言語を用いて、その場の状況に依存しつつ直接会話を展開させる教授法である」と説明し、次の二つの基本原理を挙げている。

- ・学習者に、教室の中ですぐに使うことのできる言語表現を与える
- ・学習者は、毎回リアルタイムで、互いに目標言語を用いて日常生活と結びついた会話を  
行う<sup>8)</sup>

これらの基本原理を見た限りでは、いわゆる「会話」の授業では頻繁に実践されている活動であり、新鮮味に欠けるという印象を与える恐れがある。この引用の直後に指摘されている通り、メソッド・イメディアットの授業を実際に体験すればすぐにその独自性を理解することができるのだが、言葉で説明するのは意外に困難である。

最初に挙げられている「教室の中ですぐに使うことのできる言語表現」を習得するために、教科書には「構造ボックス « Boîte de Structures »」と呼ばれる図式化された会話文のパターンが示されている。特筆すべきは、フランス語版の教科書『Conversations dans la classe』の基礎編とステップアップ編の場合、文法事項の説明および動詞の活用表が見当たらないことである。「tu」と「vous」の言い換え等は紹介されているが、基本的には語彙リストの和訳を見て、理解に役立てることになる。二番目の「毎回リアルタイムで互いに目標言語を用いて」会話をを行うという作業は、「会話テスト」によって実現される。「会話テスト」の詳細は、次章で扱う。さらに「日常生活と結びついた会話」の内容とは具体的にどのようなものであるのか、教科書の目次から見てみよう。住まい、通学手段、スポーツ、音楽活動や習慣などがテーマになっている。そして注目すべきは、教科書のはしがきにも書かれているように、フランス語の教科書であるにもかかわらずフランスの写真が一枚もなく、「マルタンさん」や「デュボン氏」などの架空のフランス人も登場しないことである。つまり、各々が日本で暮らす「私」について、実際の状況に即した会話をすることが求められるのである。

次に、メソッド・イメディアットの日本語版教科書の著者である池澤明子氏の説明も見ておきたい。池澤氏によれば、メソッド・イメディアットは「学習者と教師が、教室で、自分自身のアイデンティティを保持して、一対一で話すための仕掛け」であり、その目的を以下のよう  
にまとめている<sup>9)</sup>。

初級会話授業を円滑に機能させ、学習者全員に目標言語使用体験を与えること。特に、学習者数が多い、学習者間のレベル差・能力差が大きい、学習者が教室以外で目標言語を使用する機会がない、学習目的が実用目的でない、などの条件によって、学習者の授業活動参加意欲を刺激するのが困難な環境で、それを可能にすること。

このように、メソッド・イメディアットの狙いは学習者全員の個人的な会話体験を重視することで、彼らの授業参加意欲を高めることにある。また池澤氏は、メソッド・イメディアット式授業における「会話」の三原則を挙げている。

1. 学習者も教師も自分自身のアイデンティティを保持して話す
2. 互いの個人的情報や知識、意見の交換をする（インフォメーション・ギャップがある）
3. 2人または3人までで行う

教室において学習者が自分のアイデンティティを保持して話すという方針は、ロール・プレイ等の活動の場合とは異なり、常に学習者自身に関心が向けられることになる。そこから二番目にあるように、互いのインフォメーション・ギャップを埋めるという作業が「会話」の基本となるのである。

もう少し具体的に見てみよう。池澤氏は研究会の発表<sup>10)</sup>において、「会話」を「当事者は全人格の表現として、持てる目標言語能力とコミュニケーション能力、その他の知識のすべてを動員して話す」と定義し、メソッド・イメディアットにおける会話の要件として、次の6点を挙げている。

1. 当事者は全員、自分自身として話す
2. 「いま、ここで」話す
3. 当事者は自分で文を産出する
4. 内容は当事者がコントロールする
5. 内容は当事者にとって必然性がある
6. 同時にクラス全員が当事者になる

一番目の「自分自身として話す」、つまりアイデンティティを保持するという考えは、上述したようにメソッド・イメディアットの基本的理念である。これは五番目に挙げられた、会話の内容に「必然性がある」という要件とも関連する。現実の自分として話す方が、会話を展開する上で無理がない場合が多いとの考えが根底にある。三番目の「内容は当事者がコントロールする」に関しても、同様である。例えば架空の人物を演じる場合は、自分が内容をコントロールしながら会話をしているという実感が乏しくなると想像できる。

毎回、全員が自分自身として、必然性のある内容をフランス語で話すこと——これを初級クラスで実現するのは、一見困難であるように思えよう。限られた時間の中で、さらには初心者との乏しい文法知識と語彙で、どのような会話が可能であるのかという疑問が生まれるのは当然である。また、常に自分や日常をテーマにすることは、教養を身につけるべき大学生として深

みに欠けるという批判もある。しかし、メソッド・イメディアットの「いま、ここで話す」という方針は、何よりもまず学習者にフランス語の単語や発音を覚えなければならない「理由」を与えるのだ。学習にそれほど強い動機を持たない者にとって、単位取得という目標はあるものの、いつどこで使うともわからないものを、ただやみくもに暗記することに意義を見出すのは容易ではない。毎回話す場がもうけられることで、授業でやるべきことが明確となり、また自分たちが授業の主人公であると実感することが可能となるのだ。

そもそも筆者は、教壇に立って間もない頃、つまりメソッド・イメディアットを実践する以前の授業では、「話す・発音する」ことに関する学習者たちの消極的な態度に常に悩まされていた。一般的に、筆記問題にはまじめに取り組む者でも、発音練習を積極的に行う者は少数派ではないだろうか。近年、中学校や高等学校の英語教育においてコミュニケーションが重視されるようになってきているとは言え、教室内で外国語を話すことに抵抗や羞恥心を感じる学生は多い。だが、メソッド・イメディアット式授業を開始した時に予想外であったのは、毎回の「会話テスト」において必ずフランス語で話さなければならないという目標があれば、学習者たちは全体練習でも積極的に発音練習に取り組むことであった。さらに「自分」がテーマであると、「フランス語でこういう会話ができるのか」という新鮮な発見を彼らにもたらしたように見受けられた。「パリ」や「デュボン氏」などとは全く関係のない、日本に住む「私」そのものが教室内で常に最大の関心事になるという環境は、教師の予想以上に学習者たちを刺激し、フランス語学習の動機付けに結びつくように思われる。

また、池澤氏の説明にある「持てる目標言語能力とコミュニケーション能力、その他の知識のすべてを動員して話す」ことを実践するのは、従来の授業形式では困難ではないだろうか。初修者を対象とする会話重視の授業においては、教科書で与えられた語彙や表現を暗記し、それを披露するというのが主な流れであろう。もしその場で表現を忘れた場合、不合格や減点といった評価が与えられる。コミュニケーション能力の養成を目指しながらも、実質は暗記能力を測ることに終始していると言えよう。無論、語彙や表現を暗記するのは、外国語学習において必要不可欠な作業である。だが、フランス語を専門とせず、おそらく人生において最初で最後であろうフランス語学習に取り組む者に常に完全な暗記を要求することは、彼らの多くを萎縮させる結果をもたらすように思われてならない。周知のように、会話やコミュニケーションは、暗記した言葉の運用力のみ依存しているわけではない。ジェスチャーなどの非言語的要素も活用するであろうし、フランス語の会話において時には片言の英語を使用することも、十分に想定できる事態であろう。そうした「すべてを動員して話す」ことを目標に授業を展開できるのがメソッド・イメディアットであると筆者は考えている。より具体的に言えば、メタ・コミュニケーションの使用を会話テスト時に許可することで、全てが暗記の完成度に左右されるというスタイルを避ける事が可能となる。

## 1.2 授業の進め方

メソッド・イメディアットを用いた授業は、どのような教材を用いて、どのように運営するのであろうか。メソッド・イメディアットの教科書出版を手がけ、研究会を主催しているアルマ言語教育研究会のサイトから説明文を見てみよう。

具体的には、教材作成法と授業運営法を提案しています。教材では「質問→答え→反応」で構成される会話文が図式化され、会話の当事者によって入れ替え可能な部分が強調されています。授業では、これを見ながらまたはこれを覚えて、学習者同士または学習者と教師が実際の会話を行っていきます。大人数クラスでも全学習者に平等に多くの発話機会を与える様々な工夫があります。出席表とその使い方のシステムがそれを助けます<sup>11)</sup>。

ここで、メソッド・イメディアットの重要な三つのキーワードが示されている。まず、教材における「質問→答え→反応」から構成される図式化された会話文——これが前節でも触れた「構造ボックス« Boîte de Structures »」である。次に、学習者同士あるいは学習者と教師が実際に会話を行う——これは「会話テスト」のパートである。そして、「出席表 (Fiche de présence)」。メソッド・イメディアットの授業方法は実践する教師によって実に様々であるが、これら三要素は基本的に欠かせないものである。まずは教科書に紹介されている基本的な授業の進め方を確認し、その後三要素の活用方法を検討したい。

教科書『Conversations dans la classe』の冒頭では、メソッド・イメディアットの概要や授業の運営法、会話における文化的ルールなどが詳細に説明されており、教師や学習者にとって必須の情報を得ることができる。そこで、授業の進め方は三つのパートから構成されると説明されている。第一のパートは、その日に習う言葉や文章のプレゼンテーションであり、ここで教科書の「構造ボックス」を見ながら文の組み立て方や単語の意味を確認し、会話モデルを紹介しながら発音練習を行う。第二のパートは会話の実践練習であり、ペアやグループに分かれて会話練習を行い、教師は教室を歩き回りながら練習の様子をうかがって適時アドバイスを与える。そして最後のパートが「会話テスト」の実施である。テストの形式は様々であり、教科書に参考例として挙げられているだけでも8種類が存在する。毎回どのような形式で実施するのか、学習者の状況によって選択可能な点が大きなメリットではあるが、同時に教師を大きく悩ませるパートでもある。学習者にある程度の緊張感を持たせ、難易度が適切であり、受け終わった後に達成感をもたらすテスト形式を決定するのは容易ではない。しかし、この「会話テスト」を無事に終えることが単位取得を望む学習者たちの最大の目標となるので、教師のテスト形式の運用力こそが授業の成否を決定すると言えよう。この「会話テスト」こそが、メソッド・イメディアットの核となる作業である。第一そして第二のパートは全てテストを受けられるようにするための準備活動であり、テストの存在がフランス語学習の動機付けとなるよう学

習者たちに指導を行うのが肝心である。

### 1.2.1 第一のパートについて

第一のパートを筆者がどのように行ったか振り返ってみたい。『Conversations dans la classe』基礎編では、各課にテーマに応じた基本となる一文（全て質問文）がタイトルに掲げられており、基本、発展、単語集、そして練習問題の4ページから構成されている<sup>12)</sup>。最初のページには質問文、そしてそれに対する答え方を学ぶのに必要な基本構造が示されている。ここでは、教師は説明を最低限にとどめることが重要である。例えば、第1課のタイトルはメタ・コミュニケーションに関する表現であり、「« conversation »はどういう意味ですか？(Qu'est-ce que ça veut dire « conversation »?)」という質問文である（資料1参照）。フランス語に初めて触れる学習者にとって、いきなりこの文を文法的に理解するのは当然容易ではないが、この場合は動詞の活用等を説明する必要は全くないのだ。各単語の意味を簡単に紹介した後、「ケスクサヴディール～」そして「サヴディール～」という読み方を覚えさせる。その際、筆者は必ず黒板にカタカナでおおよその発音を示した。フランス語に特徴的な« r »の音も、「うがいする時のような音に似ている」とは説明するが、余りこだわらないよう述べる。CDを使用してネイティブの発音をひとつおき聞かせるが、初期段階では、学習者たちの心理的負担を軽減することに徹底し、カタカナ発音でも問題がないと繰り返す。彼らが気軽にフランス語を口にする勇気を与えるために、教師も思い切った時にはカタカナ読みで発音してみることも有効であった。

ここで学習者たちの様子を見て、余裕があれば発展のページに進み、さらに語彙を増やして文のパターンを習得することも可能である。だが、例えば第1課では発展ページにて「この単語はどのように発音するのですか(Comment on prononce ce mot?)」というやりとりが登場するのだが（資料2参照）、これを同時に習得するのは負担が大きいと思われるれば、このページを扱う必要はないであろう。とりわけ第1課と第2課（「こんにちは」はフランス語で何と言いますか？« Comment on dit 「こんにちは」 en français? »）のタイトル文は、以後の会話テストにおいて常に使うことになるメタ・コミュニケーションの表現であることから、学習者に完全に覚えさせる必要がある。集中して基本ページに取り組むべきであろう。

第1課と第2課は、日本語を積極的に使用することが、学習者の緊張感を和らげる効果を生み出す。ここで、3ページ目にある単語リスト（資料3）をうまく利用したい。発展ページで登場する語彙も全てリストに載っているが、発展ページを扱わずとも、リストに記載された単語全てについて発音練習を軽く行った後に、各単語について「～はどういう意味か」「～とはフランス語で何と言うか」と順番に尋ねていけば、学習者はリストのフランス語や和訳を見ながら答えられるので、メタ・コミュニケーション表現の習得に集中させることができる。例えばそれは、次のようなやりとりである。

（教師）—Qu'est-ce que ça veut dire « au revoir »?

（学生全員，教科書のリストを見ながら）—Ça veut dire « さようなら ».

また，こうしたパターン・プラクティスにおいて，簡単な英単語を使用するのも単調さを避けるひとつの方法である。例えば，「“thank you”はフランス語で何と言いますか（Comment on dit « thank you » en français?）」といった具合である。筆者の経験では，英語嫌いの学生でも，この程度の導入では嫌悪感を示す者はおらず，むしろ全く未知の言語であるフランス語のなかで馴染みある英単語が効果的に耳に響き，逆に安心感を与えた印象を持っている。学習者たちの反応を見ながら，日本語を使用するより英語の使用が適当であると思われたならば，積極的に英語を使用して良いだろう。

### 1.2.2 第二のパートについて

第一のパートが全体練習であったのに対し，第二のパートでは個別練習を通して会話テストの準備を進めることになる。初期段階においては，無用なプレッシャーを与えないためにも，第一のパートでは個人を指名して全員の前で答えさせることを避けた方が無難であろう。よって第一のパート中に学習者たちの個人的な発音の誤りを把握することは難しいので，第二のパート中に可能な限り個別に発音等について指導を行うことが肝心である。

第二パートで筆者が行った工夫は，状況によってはペアないしグループ練習を強要しないことである。教師がペアやグループ作業がしやすいクラスの雰囲気作りに努めるのは当然ではあるが，さしあたって筆者は次のような方針を立てていた。それは，「会話テスト」において教師とあるいは教師の前でクラスメートとフランス語を話せば十分である，というものである。あくまでも目標を「会話テストを受けること」に置き，「個別練習」の時間である第二パートにおいては，例えパートナーを持たずひとりであっても，まじめにテスト準備に取り組んでいるのであれば，その姿勢を尊重するよう心がけた。というのも，ペアやグループ練習を強制した場合，もし双方のペースや学習に対する姿勢が異なれば，それは大きな心理的負担となって彼らにのしかかるからである。従来の教材によく見られる「この表現を使って，隣の人と会話をしてみましょう」というタイプの設問がクラスで使いにくいとすれば，原因はそうした側面にあるのではないだろうか<sup>13)</sup>。無論，様子を見ながら教師が指名して適当にペアを作った方が良い場合もあるだろう。というのも，まだお互いをよく知らないクラスの場合は，時に教師の指示によってペアになることで結束感が生まれ，練習に集中できるという利点があるからだ。だがペア作業となれば，相手に気を使うことで集中できなかつたり，萎縮したりする者もいる。ひとりで練習している者には，教師が必ず声をかけることによって孤独感を感じさせないようにするのは必須であるが，大学生ともなれば各自の自主性に委ねることも有効である。筆者の経験では，ひとりで練習を好む者も，テストの場ではクラスメートとにこやかに話す場合

がほとんどであった。また授業回数を重ねるにつれて、クラスメート同士の連帯感が深まり、ペアやグループ作業が活発になる様子も見受けられた。いずれにせよ、授業時間内では、フランス語学習以外のことで不安や緊張感を抱かせないことが重要である。

### 1.2.3 第三のパートについて

第二パートの準備時間が過ぎれば、いよいよ「会話テスト」の実施である。テストは、筆者が担当したクラスの人数が最大で30名程度ということもあり、毎回全員が受けるよう義務付けた<sup>14)</sup>。テストは、練習している他のクラスメートたちとは少し距離を置き、教室の前方で実施した。教室はそれほど大きくないので、他の者がテストの様子を知りたいと思えば、練習を中断して聞き取ることが可能な距離ではある。テストを受ける者にとっては、ある程度の雑音がある方が気が楽であるようだが、幸い筆者の経験では、全員が練習を中断して沈黙の中でテストが行われることはなかった。

テスト実施の為に最低30分を確保するようにしていたが、その日学習する内容によっては時間不足となるので、人数や内容によってテスト形式を考え、出席者全員がテストを受けられることを目指した。というのも、時間切れでテストが受けられなかった出席者はその大部分が落胆し、せっかくの準備が生かせないと苦情を申し出たので、十分な時間確保を最優先事項としてテスト形式を決定した。

クラスの規模にもよるが、「会話テスト」は教師と学習者の1対1で行えば、通常1～2分程度の時間しかかけられない。それが慌しければ、ペアで実施して倍の時間を使うという形式も可能である。無論3人以上のグループにして、一回のテスト時間をより長くすることも可能だ。そして人数だけでなく内容を考慮すれば、より多くのヴァリエーションが考えられる。教科書に紹介されているテスト形式は、「インタビュー」テスト、「バトンタッチ」テスト、「模擬会話」テスト、「先生への質問」テスト、「模擬会話+質問」テスト、「2人での会話」テスト、「3人での会話」テスト、「4人の生徒での会話」テストである（資料4参照）。初期段階に実施しやすい形式は、「インタビュー」テスト（教師が質問し、学生が答える）と「バトンタッチ」テスト（教師が質問した後、学生が教師に質問をする）である。あるいは前もって準備させた模擬会話を披露させる形式も、比較的实施しやすい。

## 2. 「会話テスト」について一実施するうえでの工夫

前章で紹介した池澤氏のメソッド・イメディアットの概説では、「会話」の際に意識されるべき点として次の4つが挙げられている<sup>15)</sup>。

1. 「質問」と「答え」に終始せず、相手の「答え」に「反応」を返す。

2. 一方的に質問されるのではなく、相手にも（特に教師に）質問する。
3. コミュニケーション・ストラテジー（特に補償のストラテジー）を用いる。
4. 個々の習得レベルと興味に応じて「会話」を発展させる。

1～3は、いわゆる方略能力の養成を視野に入れた指摘である。4に関して言えば、少人数で頻繁に実施されるという「会話テスト」の特性を生かし、個人のレベルを配慮した対応が求められる。各学習者の資質と関心を把握し、それに対応した柔軟な指導を行うことはメソッド・イメディアットの大きな利点となりうる。筆者が「会話テスト」実施にあたって注意していたのも概ねこれら4点であるが、本章ではテストの具体的な実践方法、そして独自に行った工夫を紹介したい。

## 2.1 メタ・コミュニケーション表現の活用

「会話テスト」の実施にあたっては、何よりもまず第1課と第2課で学んだメタ・コミュニケーション表現の使用を奨励した。当日学習した表現や語彙を十分に覚えられなくとも、これらの表現さえフランス語で言うことができれば会話テストに合格することが可能である、と最初から徹底して理解させるのである。質問が理解できない場合、「～ってどういう意味ですか」と教師に尋ねても全く問題はなく、また質問に答えるのに必要な語彙を思い出せない場合は、「～ってフランス語で何と言うのですか」と尋ねれば良いのだ。たとえこれらふたつの質問を繰り返してテストが終了しても構わないと何度も説明し、重要なのは会話を続ける意志を持ち続け、相手の言うことを理解しようと集中し、コミュニケーションを試みる事であるとクラス全員に浸透させる。

従来の教科書では、メタ・コミュニケーションの表現が紹介されてはいても、使用する状況を実際につくり出すことは稀ではないだろうか。初心者にとっては、目標言語を用いて授業中に質問をする事自体が、大きな心理的負担を強いられる行動であろう。そもそも、日本語でも授業中に質問をするという行為が習慣となっていない学習者が大部分を占めている。「テスト」であればなおさら、教師に何か尋ねるのは特別な場合のみであると認識しているのが普通だ。メタ・コミュニケーションの使用を習慣にする事は、学習者たちに「テスト」ではあってもその目的は会話を継続することであると理解させ、わからないことがあれば教師に教えてもらえば良いのだ、という安心感を与える。そこから自ら質問をする主体性が生まれ、積極的にフランス語を口にする姿勢が整う。テスト中質問することに抵抗を感じなくなれば、準備時間においても積極的に質問をする者が多数を占めるようになる。また、それまで正誤を問うテストしか経験していない彼らにとっては、こうした「会話テスト」は外国語学習に関する認識の変化をもたらし、外国語がコミュニケーションをとる手段であることに改めて気付く契機ともなるはずである。

## 2.2 ルール作りー日本語と沈黙の禁止, 相槌と「コメント」の義務

メタ・コミュニケーションの表現を使うことができて、初心者が限られた知識でフランス語会話を展開するのは、容易ではないだろう。そこで会話を継続するために様々な工夫を教えることが重要ではあるが、教えても実践させることは困難である場合も多い。そこで、明確な「ルール」としてそうした工夫を取り入れることが効果的である。教科書『Conversations dans la classe』には、会話を発展させるためのアドバイスやルールが多く紹介されており参考になるが、筆者が特に強調したのは以下の3つのルールである。

まず、日本語の使用に関するルールである。「会話テスト」において、意味を説明する為に日本語の単語を用いるのは何ら問題ないが、それ以外での日本語の使用は厳しく禁止する。というのも、「～はどういう意味ですか」と尋ねられ、そこで答えるのはいつも教師であるとは限らない。例えばAとBという学生ふたりに会話をさせるテストの時、AがBの言う事を理解できずにBにその意味を尋ねるパターンも起こりうる。そうした場合、Bが日本語を用いて答えるのは可能である。だがそれ以外は、一切日本語の使用は許さないことが肝心である。さもなければ、日本語を立て続けに口にしてしまう場合もあるからだ。特に日本人教師が担当している場合、日本語が通じるという安心感から、学生が日本語を連発してしまう事態も予想される。そこで筆者は、ルールを無視して日本語を発した場合、その会話テストには一番低い点数を与えると宣言した。この取り決めは非常に効果的で、学習者たちに「フランス語を話さねばならない」という適度な緊張感を与えることができた。意味を日本語で説明することが可能であるからこそ、明確にその使用範囲を線引きすることが必要である。

次に、沈黙の禁止である。学習者が沈黙する理由として、答えや言うべきことがわからない場合と、言いたいことをフランス語で何と言うか思い出すのに時間がかかる場合が想定される。前者の場合にはすぐにメタ・コミュニケーションの表現を使うことで避けられる。問題は後者のパターンであるが、沈黙を避ける手段として、例えば「えっと…」と言いたい時は「*euh...*」とフランス語で言うよう指導した。沈黙によって雰囲気が重苦しくならないよう、この「*euh...*」を考えるための時間稼ぎに使うようアドバイスをしたところ、上手に利用する学生がいたのには感心した。「禁止」という言葉は重く響くが、筆者の経験では、このルールは逆にクラス全員にフランス語を話す勇気を与えたように思われる。従来の授業スタイルでは、わからなければ沈黙すればよい、というのが一般的な学習者の習慣であろう。だが沈黙は「禁止」だと意識化されれば、主体的に発話することが必要であるという認識が深まり、クラス全員の態度が変化し始める。そうなれば、積極的にフランス語を口にすることが習慣として身につくのである。

最後に、相槌や「コメント」を義務付けることである。この場合の「コメント」とは、池澤氏の言う「反応」に相当し、相手の言葉に対する何らかの反応を示す。それは、「あ、そうなんですか? (「*Ah bon?*」)」や「それはいいですね。(「*C'est bien ça.*」)」などの簡単な表

現でかまわない。重要なのは相手の言葉に関心を示すことである、と筆者は繰り返し説明を行った。授業目標は、「フランス語でコミュニケーションをとろうとする姿勢を持つこと」である。コミュニケーションをとろうとすること——それは相手の言うことに関心をもちながら、会話を継続しようとする意志を示すことではないだろうか。日本語で会話している場合でも、自分の答えに相手が全く無反応であれば会話を続けることが困難であることを確認し、相手の言葉に何らかの反応をとるように注意する。さらに、質問に対しては返事だけでなく、必ず「それではあなたは？（« Et vous? »）」と聞き返すことも義務付けた。聞き返すことも相手に対する関心を示すことにつながり、会話を発展させるうえで大事な表現であることを全員に理解させた。こうした反応の習慣形成と共に、ジェスチャーが豊かになる学習者たちの姿も見受けられた。すぐに言葉が見つからない場合でも、何らかの反応を示さねばならないという発想が、ジェスチャーの使用に結びついたと思われる。こうした姿勢も、コミュニケーション能力を向上させるうえで非常に有用であった。

初期段階の内に、こうした「禁止」や「義務」のルールを徹底するのが重要である。強制されて実行している状態も、回を重ねるごとにごく自然な習慣となっていく。なかにはふざけた様子で相槌や聞き返す表現を連発する者もいたが、それだけでは「会話テスト」は乗り切れず、必ず他の表現も使用する機会があるので、特に問題にはならなかった。

### 2.3 より長い会話テストへー既習事項の積み重ね

メタ・コミュニケーション表現を扱った第1課と第2課を終えれば、いよいよ本格的なやりとりの練習である。メソッド・イメディアットは、基本的に一回の授業で完結できる形式であるが、筆者の場合は継続的な出席を促すために、また少しずつ長くそして内容豊かな会話ができるよう、内容的には連続するスタイルを目指した。そのために、既習事項を積み重ねていく方式をとっていた。例えば『Conversations dans la classe』基礎編の第7課で登場する「挨拶」と「天気」に関するやりとりは、それ以降の会話テストにおいても必ず最初に話すことを定めた。習った当日はその会話モデルを覚えるだけで精一杯であったはずの学習者たちも、毎回挨拶をし、天気を話題にすることで、少なくともその部分については流暢に言葉を交わせるようになるのである。そうした「少しでも流暢に言葉が交わせるパートを増やす」ことを目指して指導を行った。

例えば第12課（「通学時間」がテーマ）を学習する日の「会話テスト」の内容は、以下のよう流れを提案する。

挨拶～天気～住まい～通学手段～通学時間

前半の4つのテーマは既習事項であり、テスト実施前に全体で簡単な復習を行う。重点的に取

り組むのは、新しく学習した「通学時間」に関する会話であり、それ以外のテーマに関してはできるだけ簡単な表現を用いて話すよう求めた。さもなければ、肝心の最後のテーマについて話をする前に、時間もエネルギーも消費してしまうからである。例えば、「住まい」に関しては次のようなやりとりで十分である。

A：私は京都に住んでいます。あなたは？ (J'habite à Kyoto. Et vous?)

B：私は大阪に住んでいます。(Moi, à Osaka.)

A：そうですか。(Ah bon, d'accord.)

こうした指導に加え、効率よく実施できるテスト形式の選択も重要である。例えば、教師と学習者の1対1でのテスト形式にするならば、教師が質問すると決め、学習者を答えや相槌、そしてコメントを言う側の練習に専念させれば、準備時間が多少短くともテストを開始することができる。それでも、複数のテーマを扱えば時間がある程度長くなるのは避けられないので、後述するように、黒板を活用して学習者たちがスムーズに会話を進められるように工夫する場合もあった。

## 2.4 ペアでのテストについて

学生ふたりでの会話テストを実施する場合は、筆者はできるだけ練習の時とは異なるパートナーでのペアを指名するよう試みていた。そうすれば、練習とは違う緊張感が生まれる。また、様々な相手とテストを受けることで、クラスメートの個性やフランス語の能力を知って刺激を受け、より積極的な学習に結びつくことが期待できる。

だが、授業回数を重ね、テストで多くのテーマを扱うことになれば、練習とは異なる相手と即興で会話することが困難な状況もありうる。そうした場合、事前に準備した会話を披露させる「模擬会話」というテスト形式が適当な場合もある。ただしその際も、筆者は「教師と1対1で話したい人はそれが可能である」という方針を伝えていた。その場合は当然、即興で教師と会話することになる。この対応は、前章の第二パートでの説明でも述べたように、ペアでの作業は時にうまくいかない場合もあるので、パートナーの出来に気持ちを左右されない選択肢を与えることも重要であると考えた結果である。また、準備時間中はクラスメートと練習を行っていても、テストは教師と話すことを希望する学習者も一定の割合で存在していた。その積極性を生かすためにも、テスト形式の決定にある程度柔軟性を持たせることが、安定した授業運営の実現に結びつくように思われる。

## 2.5 黒板の活用

メトッド・イメディアットを導入して、筆者は受講生の助けとなるよう黒板を活用すること

が非常に多くなった。例えば、重要表現をあえて黒板に書いて残しておく。筆者は、会話テスト時に学習者が教科書を見ることを許可する形式は実施したことがない。そこで、テストを切り抜けるためにはほぼ全員がメタ・コミュニケーション表現を利用することになる。また実際に使わなくとも、いざという時のために知っておくだけで、心理的負担は大きく軽減される。そのために、テスト開始前に毎回全員でメタ・コミュニケーション表現を復習することも重要であるが、初期段階ではあえてそれらを黒板に書いておくのも有効である。フランス語初心者にとって、綴りと発音の関係は教師が想像している以上に困難である上に、メソッド・イメディアットではいきなり表現の習得から始まるので、たとえ黒板にフランス語でメタ・コミュニケーション表現が書かれていても、多くの者はその読み方を思い出すのに必死である。ゆえに、これは決して答えそのものを黒板に書いているわけではないのだ。綴りを見て最初の音が口からでてくるようになれば上出来で、それを繰り返している内にふたつの表現の発音が頭に残れば、テストを受ける時に大きな心理的支えとなる。ここで重要なのは、「会話を続けるために、利用できるものは何でも利用する」という姿勢を養うことである。教師を利用し、黒板のヒントを利用することを覚え、そこから会話をリードしようとする主体性が生まれていく。

黒板の活用は、このような重要表現のヒントを与えるにとどまらない。教師としては、「インタビュー」テストから「バトンタッチ」テスト、そして模擬会話披露という形式を経て、「2人での会話」テストや「3人での会話」テストを実施することを望むが、初心者にとって会話を即興で繰り広げるとするのは、非常に難しい要求である。そこで筆者は、ある程度の「会話のフォーマット」を黒板に書いておくことにしていた。たとえば、第12課（「通学時間」がテーマ）を扱った日の「会話テスト」は、学生ふたりで行うとする。その際、次のようなフォーマットを黒板に記すのである。AかBのどちらを担当するか決定し、彼らはテスト中に黒板を見ながら会話を進めることになる。

- A: あいさつ、元気か？  
 B: 返事、あなたは？  
 A: 返事、天気の話  
 B: 相槌／コメント  
 A: どこに住んでいるか尋ねる  
 B: 答え  
 A: 相槌／コメント  
 B: あなたは？  
 A: 答え  
 B: 相槌／コメント。通学手段を尋ねる  
 A: 答え

B: 相槌／コメント

A: あなたは?

B: 答え

A: 相槌／コメント

B: 通学時間を尋ねる

A: 答え

B: 相槌／コメント

A: あなたは?

B: 答え

A: 相槌／コメント

要は「質問→答え→それに対する相槌やコメント→聞き返す」というパターンの繰り返しを各テーマに沿って書いているだけなのだが、こうしたフォーマットを黒板に書いて、AあるいはBのパートを割り振ることにより、学習者たちはスムーズに会話続けることができる。教師としては、複数のテーマについて自由に会話することを彼らに要求したいが、会話テストにおいては、話題の流れを思い出すのに労力を使わせるべきではないだろう。学習者たちは、毎回新しいフランス語を覚えるのに精一杯である。フォーマットを提示することで、フランス語を思い出すことに彼らを集中させることができる。同じ発想から、事前に準備した「模擬会話」を披露するテスト形式の場合、日本語で書いたメモを各々が見ながらテストを受けることを許可した。これも、フランス語を話すことに集中させるためである。

しかし、これでは教師が会話の内容をコントロールしており、学習者の主体性を奪う不自然な形の会話であるという批判も当然生まれよう。だがこういったフォーマットの提示は、後々に即興で会話できるようになることを視野に入れた工夫である。「質問→答え→それに対する相槌やコメント→聞き返す」のパターンを習得するだけでも、半期あるいは一年のフランス語学習を通して、長時間の会話を目指すことが可能となる。実際に、筆者は相愛大学で、学年末に教師と学生の1対1で10分程度の会話テストを実施したことがある。このテストは、最初の五分間は学生側が会話をリードするというルールのもとで行ったが、それを実践するのに苦労した学生はそれほどいなかった。大半は、それまでの授業における「会話テスト」での経験で、会話の流れをつくるという能力を十分に獲得していた。

## 2.6 会話テスト終了後のタスク

会話テストを受け終わった後、果たして学習者は何をすべきであろうか。筆者の場合は、教科書の和訳と仏訳の練習問題に取り組むよう指示し、終われば自由に退室して良いという方針にしていた。練習問題は別途答え合わせをする時間をもうけ、そこから出題する小テストを実

施することで、学習者たちの関心が練習問題に向くことを期待した。また、アルマ言語教育研究会のサイトから、『Conversations dans la classe』の内容に即して作成された練習問題をダウンロードして使用することもあった。

ただし、会話テストを受け終わったということで気が緩み、まじめに練習問題に取り組まない学生がいたのも事実である。その場合、授業と何ら関係のない雑談をしている場合は退室するように求めた。一方、自分がテストを受け終わっても、練習時のパートナーや友人がまだ終わっていない場合は準備に協力する者も多かったので、その場合はすぐに練習問題に取り組むよう強制はしなかった。クラス全体の様子を見て、練習問題に取り組むペースは自主性に委ねるという方針をとっていた。

## 2.7 出席表の活用

### 2.7.1 自己管理の促進

『Conversations dans la classe』の基礎編とステップアップ編には、「出席表 (Fiche de présence)」のページがある (資料5参照)。受講生たちはこの出席表を毎回持参し、授業開始時に教師に提出する<sup>16)</sup>。教師はこれに出席状況と「会話テスト」の成績を記入することになるが、この出席表によってもたらされる効果を挙げておきたい。毎回の成績を具体的に視覚化することによって、学習者が自らの状況を把握し、単位取得に向けて積極的に学習に取り組むことが期待できる。自分で管理し、必ず毎回持参して提出しなければならないというルールも、授業への参加意識を強化する。また筆者は、提出時に当日の日付を学生たちにフランス語で記入させていたが、そうした取り決めも授業開始にあたってフランス語へと意識を向けさせる工夫となる。

### 2.7.2 コメントの記入

出席表には、コメント欄がもうけられている。筆者は会話テストの時、このスペースに積極的にコメントを書くよう心がけていた。それは発音の誤りに関する注意書きや学習者がわからなかった単語の意味などであり、それらをいわばメモ代わりに残しておくのである。例えば、「好き嫌い」がテーマの会話テストにおいて、「私は～が好きです (j'aime ~)」というフランス語を、学習者が「ジェメ～」と発音していれば、テスト中に誤りを正し、コメント欄に「j'aime ~ ジェム」という風を書いておく。そうすれば、次回のテスト時に学習者はそれを見て正しい発音を復習でき、教師はその学習者の誤りを思い出すことによって、注意して聞くべきポイントがわかる。様々なコメントが積み重なっていけば、各学習者たちの特徴や性格も見えやすくなり、より適切な指導を行うことが可能となる。

また、さらなるコメント欄の活用方法として、その学習者にとって個人的に必要な語彙を記入することを提案したい。例えば「週末にする事」がテーマの会話テストの時、音楽学を専攻

している学習者と、次のような会話を交わした経験がある。

教師：いつも週末は何をしますか？ (En général, qu'est-ce que vous faites le week-end?)

学習者：「楽譜」ってフランス語で何と言いますか？ (Comment on dit « 楽譜 » en français?)

教師：« partition » と言います。(On dit « partition ».)

この後、学習者は「楽譜を買いに行ったりします」と言うためにさらに質問を続けるわけだが、筆者はとりあえず「楽譜 « partition »」という単語をコメント欄に記しておく。おそらく初級者向けのフランス語教科書において、「楽譜」という単語が紹介されるのは稀であろうが、この学習者にとっては自らの日常生活に密着した単語である。このように、当事者にとっては重要な単語であり、日常について話そうとすれば必ず必要となるのに、教科書の語彙リストには見当たらず、フランス語でどのように言うかわからない、という状況はごく頻繁に起こりうる。当然、授業中のテスト準備時間内に教師に尋ねたり、あるいは和仏辞書で調べて覚えることも可能ではある。だが、質問する時間がない場合もあり、また和仏辞書を所有していない学習者もいる。加えて辞書で調べた場合、動詞の活用や冠詞の問題も浮上し、会話に導入するのが複雑に思われ、言いたいことを断念する者もいる。前章でも述べた通り、学習者たちにはテスト中にメタ・コミュニケーションの表現を好きにだけ使うことが許されており、それらを駆使し、会話テストにおいて「言いたいこと」をその場でフランス語で述べるのが目標である。初心者である彼らに、わからない場合は単語を調べ、動詞を活用させ、冠詞を選択し、文を完成させてなおかつ発音も調べよ、という作業を求めるべきではない。彼らがすべきことは、テスト中に教師に尋ねることである。そして、彼らにとって必要で頻繁に使用する単語をコメント欄に教師が記入していくことで、「自分に必要なフランス語」の知識は少しずつ増えていく。こうして「自分だけのフランス語」を少しずつ開拓していくことが、貴重な体験になるのではないだろうか。教師側にとっても、そうした語彙を毎回出席表で目にすることは、学習者の環境や趣味を把握する手助けとなり、会話をはずませるのに役立つ。そうなれば、冒頭に挙げた池澤氏による「会話」において意識されるべき点——個々の習得レベルと興味に応じた「会話」を発展させる——が実現できるのである。

このように、教師が各学習者に合わせて、いわばカスタマイズした会話を展開することができるようになれば、学習者は自分自身に関心が寄せられていると感じられるであろうし、それは決して不快な環境ではないだろう。相手に関心を示すことは、コミュニケーションの根幹となる姿勢である。いわゆるインフォメーション・ギャップを埋める作業——知らないから知りたいという関心を教師側から発信していくことで、学習者ひとりひとりが学習する意義を見出し始め、それがクラス全体の発言しやすい環境作りにも役立つことになる。

### 3. メソッド・イメディアットによる学習者の主体性向上—アンケートの声から

#### 3.1 「話す」ための文法解説

筆者がメソッド・イメディアット式授業を行っていた頃、フランス語の教科書としては『Conversations dans la classe』の基礎編とステップアップ編の二冊しか出版されていなかった。この二冊は共に文法を扱うページがなく、文法事項の解説をどの程度行うべきであるか、という点は常に大きな課題であった。2007年に出版された『Conversation et Grammaire』を使用すればこの問題は解決されるが、筆者の経験では、上の二冊を使用する場合であっても、最低限の文法説明をすれば、授業を進める上で大きな支障はないと思われる。その際心がけるべき事として、以下の2点を提案したい。

- ・教科書で登場しない事柄は説明しない
- ・一回の授業で新しく教える文法事項は最低限にとどめる

『Conversations dans la classe』は、文法という観点から見れば体系的に編集されてはおらず、段階を追って文法事項を学習することは難しい。全てを「会話テスト」で話すことに焦点を合わせ、必要最低限の文法解説を行う計画をたてることが重要である。

例えば、基礎編第3課の「フランスの方ですか？（Est-ce que vous êtes français(e)?)」に進んだ時、être動詞の活用は「*je*」と「*vous*」についてのみ紹介すれば良いのだ。「*c'est ça*」という表現も登場しているので、これもêtre動詞であると説明しても良い。だがしかし、ここで主語人称代名詞を全て紹介し、活用をひと通り説明する必要はない。この段階では、学習者が主語によって動詞が変化することを認識し、会話テストで使用する人称の活用を覚えることができれば十分なのである。従来の教材では網羅的な説明を試みる場合が多いが、すぐにその場で使う表現の習得を目指すメソッド・イメディアット式授業では、その必要はないであろう。初期段階では、初めて目にする単語が大部分を占め、それらを覚えることに大きなプレッシャーを感じる学習者は多い。よって、理解して覚えるべき項目を可能なかぎり絞りこむのが望ましい。文法事項の解説をできるだけ制限するのも、発音も学ばねばならず、結局学習内容が多岐にわたるからだ。未習事項であっても、その日は表現をそのまま暗記する事で十分な場合もある。学習者の能力にもよるが、教師側がこうしたスタンスでのぞめば、各学習者がテーマに応じた会話をするために必要最低限な表現を習得することが可能である。

無論、学習者のなかには、文法解説に十分な時間をかけない点に不満を感じる者もいる。2003年度から2005年度に相愛大学において前期末に実施したアンケートでは、「教科書に文法の説明があればもっと自習できる」という意見も見られた。そして文法の説明について、67名中41名が「現状の説明程度で良い」と答えていたのに対し、26名が「もう少し詳しく説

明してほしい」と答えた。ただし、この26名中24名の自由記述欄には「楽しかった」、「会話を覚えられた」、「言葉を覚えやすかった」、「会話テストがよかった」、「おもしろかった」、「イメージしていた難しいという印象なく授業に入ることができた」等の肯定的な感想が記されており、授業を理解するうえで大きな問題はなかったと思われる。アンケートの中には、「文法の説明の時間は少ないけど、会話の時は「je」やから「suis」だと思い出せて、あんまり文法に気をとられずに会話として覚えられるので、今学期くらいの説明で良い」という非常に具体的な感想も見られた。

### 3.2 出席の重要性

「話す」ことに特化するあまり、アンケートには「文章を書くことに慣れることができない」、「聞く練習をもっとしたい」といった批判も見受けられたが、全体的にはそれまでに受けた文法中心の授業と比較して、肯定的な評価を書いた者が多かった。その理由として、まず口頭での練習が有意義であったことが挙げられている。

- ・会話だと意外と頭に残る
- ・頭と口で覚えるので、直感的に把握できる
- ・中学や高校の時と違い、一方的な授業ではないので、言葉を覚えやすかった
- ・難しいと思ったけどあんがいできた

このように、口頭表現の習得に集中するスタイルに、「これならできる」と感じた学生は多かったようだ。ただしこれは「会話テスト」の存在によるものが大きく、テストがある故に練習に励んだ結果であろう。前章でも述べたように、「会話テスト」によって「話す」場を必ず提供することが、メソッド・イメディアットの大きな特徴である。「話す」ことが要求されるかどうかかわからない状況では、クラス全員が声を出して練習する可能性は極めて低くなる。

そして言葉を覚えられたという実感は、会話能力が身についたという自己評価につながっていく。「会話テスト」を通して、話す能力を得られたという意見が少なからず見られた。

- ・初めはいきなり会話テストは無理だと思ったが、この短期間でここまで話せた事に驚いています
- ・初めはどうなるか不安でしたが、だんだんコツが分かってきて、話せるようになった

前章で述べたとおり、会話テストでは基本的に既習のテーマについても話すことが求められるため、「積み重ねる」という作業の連続であったと言えよう。それが力を伸ばせたという自信につながった者は多かったようである。実際、テストが毎回実施されることが非常に重要で

あったとの声もあった。

- ・ 毎回テストすることで、少しずつ覚えられた
- ・ 高校の時も仏語を学んでいたが、期末テスト時にまとめてやっていたので全く覚えられなかったが、この授業では毎回テストをやるから覚えられて良かった

授業に出席さえすれば会話能力が伸ばせる——このように実感できれば、学生たちは早い内に出席することの意義を見出すことができる。

さらにこうした「積み重ねる」というスタイルは、出席することの重要性を改めて学生たちに痛感させることになった。それは「一回一回必ず授業に出る大切さが身にしみてわかる授業だった」という感想があったことからもうかがえる。教える側からしても、テストを重ねる毎に学生たちの口数が増え、表情が生き生きと変化し始めたことが非常に印象的であった。教師からすれば、テストを実施するのは出席率を向上させるための苦肉の策ではあるが、結果として学生に出席に促すことができれば、後は彼らが授業内容に有用性を感じられるよう努力するのみである。

### 3.3 緊張感と達成感

アンケートの中には、「会話テスト」を毎回実施することに対し、「テストが多すぎる」という批判的な意見も若干見られた。これは、例えテスト中に質問をすることが許可されても、教師の前でフランス語を話すことには大きな緊張感が伴うせいであろう。教師側としては、テスト開始時は無用のプレッシャーを与えない雰囲気作りに努め、笑顔やフォローを忘れないようにしていたが、学生側からすれば点数が与えられるテストはやはり緊張を感じるようである。実際アンケートには、次のような感想が述べられていた。

- ・ 会話テストのたびに緊張していました
- ・ 毎回毎回緊張してどうにかなりそうだった
- ・ 緊張の連続だった
- ・ 緊張し過ぎるあまり、基礎的なものを忘れがちでした

確かに、テスト時に緊張しているせいか表情の硬い学生もいたが、筆者の経験では緊張がマイナスに働いていたケースはそれほど見受けられなかった。早い段階の内に、「忘れてしまいました (J'ai oublié)」という表現を紹介し、緊張して言うべきことを忘れた時は、これを言って質問すれば良いと指導しておく。忘れることは決して減点対象ではなく、それを伝えることがコミュニケーションであることを認識させた。

教師は、学習者にむやみに負荷をかけることは避けるよう心がけるべきであるが、集中して学習させるためにも、適度な緊張感があるのは望ましい。それはテスト以外の時間においても同様である。テストに向けて緊張感を抱きながら説明を聞くことは、結果として学習者に授業が理解できたという満足感をもたらす。次のようなアンケートの声からも、テストの存在そのものが学生の意欲ある学習態度を形成したことがうかがえる。

- ・その場で覚えるので、ボーっとしていることがなかった
- ・とにかく目がまわりそうなくらい大変だった
- ・他の授業と空気が違った
- ・みんな必死になっていた
- ・常に自分も声を出すので、眠くなることも少なかった
- ・必ず会話テストがあるので、他の授業より、聞く意欲が出た
- ・会話テストを毎回することで、授業に緊張感がでていいなと思いました

このように、教師が考える以上に、学生側にとっては会話テストおよびテスト準備によって、学習意欲が刺激されたことがうかがえる。

メトッド・イメディアットを初めて実践した年は、筆者は少しずつ長い会話ができるようになった学生たちの成長を喜ぶ一方で、ごく限られた文法学習しか行っていないことを問題視していたことも事実であり、言語能力を内在化させる為にはやはり体系的な文法学習が必須であると考えていた。コミュニケーション能力の養成を目標としても、大部分の教科書では、文法事項の解説があり、また会話文以外のテキストに触れる機会が与えられる場合も多い。だがメトッド・イメディアット式授業の実践を通して学習者に主体性が生まれるのを見た時、目標言語を使う場を設けることで達成感を与えることの重要性を痛感させられた。中学・高校の英語教育の専門家である池岡（2006）によれば、コミュニケーション能力を育成するためには、教室を「仲間と学びあえる場」として生徒たちに達成感を実感させることが重要であり、そこで英語を好きにさせるためのタスクを成功させる条件として、以下の2点が挙げられている<sup>17)</sup>。大学の第二外国語クラスにおいても、大いに参考となるのではないだろうか。

- ①ちょっと努力すれば到達できそうなゴールを設定すること。
- ②創造的になれるタスクを考えること。

創造的になれるタスクとは、

- ア) 習ったことを使って書けるようになっていること。

- イ) 身近でイメージが持ちやすいものになっていること。
- ウ) やってみたいこと、面白そうなものになっていること。
- エ) 条件（行数や文型、単語など）が設定されていること。

この提案を「話す」ことに応用すれば、メソッド・イメディアットは十分にこれらの条件を満たしていると言えよう。毎回すぐに使うことを目指して語彙と表現を学習し、身近なテーマに沿って自分なりの会話ができることをゴールに設定することで、そこへ到達するためにすべきことが明確となり、それが達成感に結びつく。会話テストを乗り切ることは、ゴールをクリアする感覚にも相当し、そこに楽しさや面白さを見出すことが可能となる。実際、アンケートには「フランス語はもっと難しいものだと思っていたが楽しく勉強できた」という風に、学ぶことに楽しさを感じたという声が多く見られた。また、「おもしろかった、他の外国語授業もこうすればいいのと思った」といった感想もあり、達成感が得られる外国語教育を必要としている学習者側の心情もうかがえた。

### 3.4 学習者のさらなる関心の増大を目指して

序論でも述べたとおり、会話中心の授業では実用的な表現の習得に終始し、内容が乏しくなるとの懸念もあろう。しかし周知のように、時間的に制約がある状況で、いくつもの目標を目指すことは至難の業である。コミュニケーション能力の養成に専念することでその特徴を生かせるのがメソッド・イメディアットであり、少しでも話す能力が身についたという実感を与えられることに大きな利点がある。だがそれに加えて、主体性が向上し、学習意欲が高まった学習者の姿勢自体にも、大きな価値を見出すことができるのではないだろうか。

まず、教室内でフランス語を口にすることに抵抗を感じる者が減ったのは上述したとおりだが、それは次のようなアンケートの声からも裏付けられる。

- ・話しているという感覚が楽しい
- ・声を出すことがだんだん恥ずかしくなくなり、話せることが楽しくなった

筆者は、時間を見つけて、フランス語の歌を聴かせるにあたって歌詞の一部を全員で発音してみたり、あるいは有名な詩を紹介してその一節を全員で発音する機会をもうけたのだが、ためらわずに声を出して言う者が多いことに感心した。教師の手本に続いて発音する、という流れがそれまでの授業を通して習慣となっており、テストや評価とは関係のない活動においても、それは生かされていたのである。実際に発音してみることで、歌詞や詩のフランス語に興味を示す学習者たちの様子が見受けられた。教室で話すのは教師ばかり、という状況ではなく、積極的に声をだす学習者たちの姿勢により、授業が大いに活性化された印象がある。

このように学習者の授業参加意識が高まれば、教師が紹介するものにも大きな関心を寄せ、フランスやフランス語に注目する度合いも高まったように思われる。フランス語を、語学習得に強い関心を持たない学習者が「フランスという遠い国の日本語からかけ離れた近寄りがない言葉」というイメージで捉えてしまえば、学習意欲は削がれるばかりである。だが自分の日常を語れる言葉として学び始めれば、言葉を入り口にし、フランスやその奥にある文化に関心を寄せることが期待できるのではないだろうか。大部分の学生が「何となく」フランス語を選択する現状を考慮すれば、彼らの文化的関心を少しでも養うことは教師の大きな課題とも言えよう。それが、結果として外国語学習の動機付けに結びつくからである。

### 3.5 メトッド・イメディアット式発想の応用

筆者は2006年度以降、メトッド・イメディアットを用いた授業は行っていない。それでも初級クラスにおいて、授業を活性化する為に、この教授法を実践した時の発想を応用して授業活動を決定する場合がある。そこで基本となる考えは、少しでも「いま、ここで話す」場を作り出し、学習者に達成感を与えることである。

文法学習が中心となるクラスにおいても、学習者が教師の前で個別にフランス語を発音する機会を、可能な限り設定するようになった。一対一で毎回教師が学習者たちのフランス語に耳を傾ける場があることは、彼らに適度な緊張感を与え、文法学習に加えて「発音練習に参加する理由」を認識させることができる。出席者全員が声を出す機会があれば、それは教師による一方的な授業スタイルを避けることにつながり、質問等がしやすい環境作りにも役立つ。

限られた授業時間内で講義を優先すれば、出席者全員のフランス語を個別に聞くことは困難であろう。そこで筆者の場合は、発想を転換し、「最後に学習者のフランス語を聞くために授業を行う」という方針を立てて授業プランを練る。そのため、授業の後半は以下のような流れとなる。

1. 授業最後に出席者全員の発音を聞く時間が確保できるよう、扱う練習問題を選択する
2. 練習問題の文（もしくは例文や会話文など）の発音練習を全員で行う
3. 発音練習を個別に行うよう指示する
4. 読めるようになった学習者は教師に申し出て、指示に従って発音する

ここで、4番目の作業ができれば退室可能であり、またこの作業をせずに退室した場合は欠席扱いであるというルールを設定しておく。これらのルールによって、出席者全員が口頭練習に取り組むようになり、早く終わらせようと積極的に教師の前にやってくる姿が見受けられる。こうした「今日やるべきタスク」を明確に示し、それを終了することで達成感を与えることは、メトッド・イメディアットの場合と同様、授業参加意識を強化する結果をもたらす。実際

に、文法学習に対しては興味を持たず集中できない様子の学習者でも、発音練習には積極的に取り組む傾向が見られる。また、「こうやって声を出してやる方が覚えられる」と筆者に直接伝えてきた者もいた。テストとしてこうした作業をさせるのも有用であろうが、筆者の場合は、例え読み方を間違えてもその場で指摘して再練習させ、採点目的で実施しないのが基本方針である。

次に、黒板の活用方法である。前章でも述べたように、「話すために思い切ったヒントを与える」という方針は、学習者たちを勇気づけ、口頭作業をさせるうえで常に有効であると思われる。例えば、上述したような「文を個別に学習者に読ませる」タスクにおいては、次のように黒板を利用して実施する。

1. 学習者は黒板に書かれた8～10個の文の読み方を覚える
2. 学習者が文全ての読み方を覚えるのが困難であると判断すれば、特に難しいと思われる単語にカタカナで読み方を書いておく
3. 学習者は教師の前で、黒板に書かれた文の中から指定された文を読む（読む文の数は時間に応じて3～4個程度、余裕があれば全てを読ませる）

このように、カタカナである程度の発音を示すことによって学習者たちの心理的負担を軽減し、読み方を確実に覚えてほしい部分に集中させることが可能になる。筆者の場合は、特に主語と動詞の読み方を重点的に練習させる場合が多い。フランス語の綴りと発音の法則をある程度習得するのは、週に一、二回の授業しか受けない初習者の大部分にとって大変困難な作業である。とりわけ文法学習が中心であり、筆記テストによって評価がなされる場合は、綴りを覚えるためにローマ字式の読み方を用いる学習者が多いのではないだろうか。よって半年や一年フランス語を学んでも、最終的に«je»を「ジェ」と覚えて済ませたというケースはそうめずらしくない。人生において、おそらく最初で最後であろうフランス語学習の結果がこれでは、あまりにも残念ではないだろうか。文法学習や筆記作業の重要性を否定する気は毛頭ないが、やはり外国語学習という視点からすれば、発音を軽視するのはバランスが悪いと考えざるをえない。メソッド・イメディアットの目的にあるように、目標言語を言葉として使用する「仕掛け」を創出することが教師には求められるべきではないだろうか。基本単語の発音を覚えて実際に口に出してみることは、外国語を学ぶ上で必須の作業であると思われる。時間や教材など様々な制約はあるが、今後もそうした発想を忘れず、授業運営を工夫することが大きな課題である。

## おわりに

メソッド・イメディアット式授業を行っていたクラスで、非常に印象的な出来事があった。ある日教室に入ると、履修者のひとりが友人ふたりを連れて来ており、友人たちも授業に参加可能であるかと尋ねてきたのだ。授業のことを話した折に彼らが興味を持ち、一度参加したいと言ったらしい。授業の進行に差し障るので丁重にお断りしたが、授業のことが学生の間で話題にのぼり、実際に教室まで足を運ばせたという事実は、筆者にとって大きな驚きであった。その履修者は外国語学習に強い苦手意識を抱いていた様子の学生であっただけに、「フランス語が少しでも話せる」という授業は非常に新鮮であったようだ。

率直に言えば、メソッド・イメディアットを実践した当初は、即効性を求める学生たちに迎合した安易な教授法ではないかと自問することも多かった。だが、「これならできる」という声を聞く機会が増えるにつれて、筆者の考えも大きく変化した。大学の初習外国語クラスにおいて、体系的な説明を避けるという方針は教師を不安状態に陥らせるが、講義重視のスタイルでは、学習者たちの忍耐力や意欲が伴わない場合も多いのが現実である。そういった状況において何を重視するべきであるかと言えば、それはやはり冒頭で述べた「幸福なフランス語体験」であると思われるのだ。大学教育に客観的な評価が求められる時流からすれば、この目標はやや抽象的であるかもしれない。だが、より多くの学習者が目標言語を使用して少しでも達成感を味わうことができれば、それは彼らの外国語学習に対する意識の変化をもたらすことが期待できる。学習者が未知の言語を学ぶことに対して抱く期待感は、どの大学においても、いつの時代もそう変わらないのではないだろうか。柔軟な授業運営を可能とするメソッド・イメディアットの実践を通じて、あるいはその発想を取り入れた授業の実践によって、外国語学習に主体的に取り組んで興味を深め、継続的に学ぶ学習者が増えることが望まれる。

### 注

- 1) 日本語名称が2005年より「イミーディアット・アプローチ」から「イメディアット・メソッド」に改称。改称前の文献では、「イミーディアット・アプローチ」という名称が使われているが、教授法は同じである。フランス語では *La Méthode Immédiate*、英語では *The Immediate Method* である。アルマ言語教育研究会のサイトを参照されたい。  
<http://www.almalang.com/referencesjapo.html>
- 2) 大阪大学におけるメソッド・イメディアット式フランス語・ドイツ語授業の歩みは、次の資料に詳しい。AZRA, J-L., BENOIT, L., JONES, J., VANNIEUWENHUYSE, B., VÖGEL, B. (2002), 『言語文化共同研究プロジェクト 2001 外国語教授法としての“Méthode Immédiate”』, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科
- 3) フランス語の教科書は次の三冊が出版されている。  
AZRA, J-L., VANNIEUWENHUYSE, B. (2003) 『コンヴェルサション・ダン・ラ・クラスーバジック (Conversations dans la classe, Version Basique)』, アルマ出版  
AZRA, J-L., VANNIEUWENHUYSE, B. (2004) 『コンヴェルサション・ダン・ラ・クラスーフォ・デビュタン (Conversations dans la classe, Version Avancée / faux débutants)』, アルマ出版

OHKI, M., AZRA, J-L., VANNIEUWENHUYSE, B. (2007) 『コンヴェルサシオン・エ・グラメール (Conversation et Grammaire)』, アルマ出版

バジック編は基礎編, フォ・デビュタン編はステップアップ編と称されることもあるので, 本論でもその表記に従う。その他英語, ドイツ語, 日本語の教科書は, 上記アルマ言語教育研究会のサイトにて紹介されている。

- 4) 授業を行ったのは, 相愛大学と神戸松蔭女子学院大学短期大学部である。相愛大学では2003年度から2005年度まで, 神戸松蔭女子学院大学短期大学部では2005年度にメソッド・イメディアット式授業を行った。両学とも選択必修科目としての外国語科目の授業であり, 非フランス語専攻の初習者が対象であった。ただし, それぞれの状況は大きく異なっている。相愛大学では週に2コマを履修するクラスであり, 両コマ共ひとりの教師が担当し, その内容も教師の裁量にまかされていた。神戸松蔭女子学院大学短期大学部では文法と会話の2コマ履修だが, それぞれ別の教師が担当し, 筆者は会話クラスを担当した。
 

相愛大学で行った授業の詳細に関しては, 次の拙論も参考されたい。

瓜生濃世 (2004), 「メソッド・イメディアットを実践して」, 『La Lettre』第7号, アルマ言語教育研究会, pp. 1-4

水野いづみ, 瓜生濃世 (2004), 「会話の実践による授業の活性化」, 『Rencontres』第18号, 関西フランス語教育研究会, pp. 29-33
- 5) フランス語教育におけるコミュニカティブ・アプローチの状況については, 以下の資料を参考にした。
 

藤田裕二 (1990), 「Exercice から Activité へーフランス語教授法に関する一考察一」, 『玉川大学文学部紀要論叢』第31号, 玉川大学文学部, pp. 309-322

中村啓佑, 長谷川富子 (1995) 『フランス語をどのように教えるか』, 駿河台出版社

平嶋一美 (2002) 「コミュニケーティブ・アプローチとその実践に関する考察」, 『関西大学視聴覚教育』第25号, 関西大学, pp. 1-10
- 6) 動機づけの研究動向については, ドイツ語教育の専門家である藤原三枝子氏の発表を参考にさせて頂いた。藤原三枝子, 「自立的学習者の養成のために」, 第23回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会「外国語教授法の新たな試み」(於 甲南大学), 2007年7月7日
- 7) アンケートは前期・後期それぞれに実施し, 回答数は相愛大学が111名, 神戸松蔭女子学院大学短期大学部が31名, のべ142名。後期のみ受講した学習者はゼロである。なお, アンケートは相愛大学では筆者が独自に作成したアンケート用紙を使用し, 神戸松蔭女子学院大学短期大学部では大学から義務付けられた用紙を用いて行った。
- 8) 前掲書, 『外国語教授法としての“Méthode Immédiate”』, p. 7
- 9) 池澤氏が2004年に執筆した, アルマ言語教育サイトに掲載されている次のテキストからの引用である。
 

池澤明子 (2004), 「イミメディアット・アプローチの概説」, <http://www.almalang.com/Immediate%20Method-Japanese.pdf>
- 10) 池澤明子, 「イミメディアット・アプローチ入門または再入門ワークショップ」, 2004年秋季会話教育研究会 (於 大阪大学), 2004年10月9日
 

引用する文章は, 全て同発表で配布された資料からのものである。
- 11) アルマ言語教育研究会のサイトにある「イミディアット・メソッドの紹介」ページから。 <http://www.almalang.com/referencesjapo.html>
- 12) 筆者は『Conversations dans la classe, Version Avancée/faux débutants』も使ってみたが, 初習者が対象であってもほぼ同じ形式の授業運営が可能であった。この教科書は『Conversations dans la classe, Version Basique』よりも構成がコンパクトであり, 各課は構造ボックスのページと語彙集・練習問題のページの2ページから成る。課の数が増える分, 内容的には語彙も増え, 文法的にもやや高度な項目を扱う。
- 13) ペアやグループでの作業は, いわゆるコミュニケーション能力の養成を重視する教科書では頻りに登場するが, 組み合わせによっては期待通りの効果が得られないことは多くの教師が実感しているのではないだろうか。他者との関わりに抱く不安の度合いに差がある組み合わせの方がコミュニケー

ション量が多くなるという報告もあり、効果的なペアワークを考える上で個人の資質を配慮する必要がある。

八島智子 (2004), 『外国語コミュニケーションの情意と動機』, 関西大学出版部, p. 19-20

- 14) 教師によってテスト形式やその実施回数は様々である。大人数の場合、毎回全員に実施することを必須にせず、2～3回に一度という方法も可能であろう。また、大学によっては院生等をアシスタントにしてサポートが受けられる制度があり、アシスタントの協力によってテスト回数を増やすという方法も考えられる。実際に、研究会において京都大学と西南学院大学のティーチングアシスタントによる報告があった。

岸 彩子, 飯田みか, 「イミディアット・アプローチ授業での TA 活用法」, 2004 年秋季会話教育研究会 (於 大阪大学), 2004 年 10 月 10 日

- 15) 池澤明子 (2004), 「イミディアット・アプローチの概説」, <http://www.almalang.com/Immediate%20Method-Japanese.pdf>

- 16) 筆者は教科書を切り取らず、コピーを準備して配布した。クラスの人数が多い場合は、テスト受験希望者のみに出席表を提出させるという方法もある。

- 17) 三浦 孝, 中嶋洋一, 池岡 慎 (2006), 『ヒューマンな英語授業がしたい!』, 研究社, p. 61

## French Teaching with the Immediate Method (la Méthode Immédiate)

—Trying to Promote Students' Active Learning in Classroom—

Atsuyo URIU

### Abstract

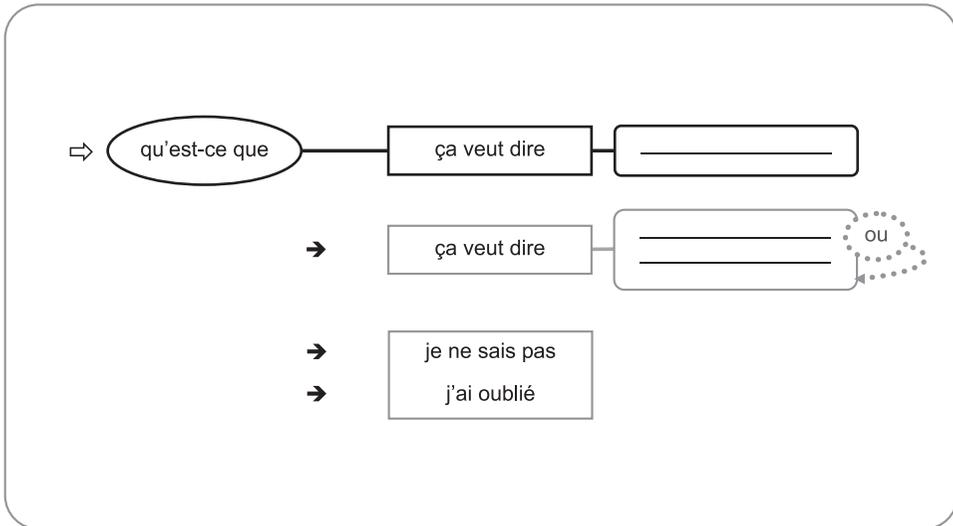
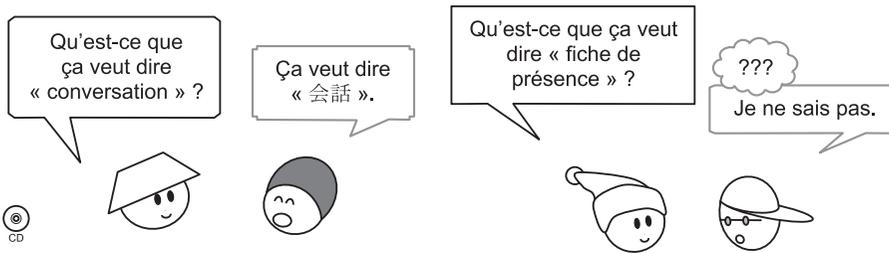
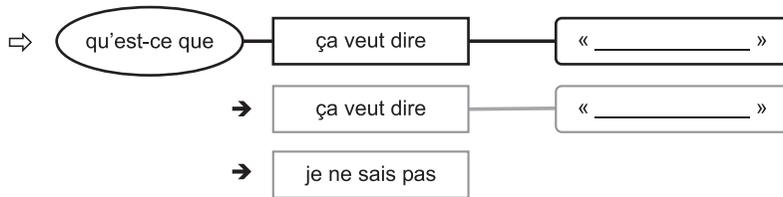
The immediate Method (la Méthode Immédiate) is an original teaching method conceived for the purpose of enabling actual conversations in foreign language classrooms. It is a conversation teaching method that was created in Japan during the year of 1995–1999 to solve the typical problems held in the classes for Japanese. Born in the context of teaching French at the University of Osaka, the method has been introduced to the world of English teaching and adopted for teaching French, German, and Japanese.

In this paper, the author presents her own experiences in teaching French through this method from 2003–2005. In order to encourage students who were not active or not interested in speaking the said language, the author made the students take and pass the “Conversation Test” every after one module for them to be evaluated. As a result the “Conversation Test” helped them find pleasure of speaking French, and they started to take a positive attitude for learning this language.

Finally, the author will suggest that some ideas in the method could be applied to get the interest of the students even in classes where they study mainly the French grammar.

**Keywords:** French teaching, Immediate Method, Méthode Immédiate, Communicative Approach, Motivation

**Qu'est-ce que ça veut dire « conversation » ?**  
 「Conversation」はどういう意味ですか？



Qu'est-ce que ça veut dire « conversation » ? 「Conversation」はどういう意味ですか？

Qu'est-ce que ça veut dire « classe » ?

Ça veut dire « 授業 » ou « クラス »

???

Comment on prononce ça, s'il vous plaît ?

On prononce [ répété ]. Dans ce mot, on prononce le E, mais on ne prononce pas le Z.

Ah bon, merci.

CD

Répétez

←OK

-----

-----

-----

→ ça veut dire

→ je ne sais pas

→ j'ai oublié

comment

est-ce qu'

on prononce

ce mot ça

←OK

s'il vous plaît

→ on prononce

« \_\_\_\_\_ »

→ dans ce mot

on prononce on ne prononce pas

le T  
le S  
le E  
le Z

ou

mais

1. A : Qu'est-ce que ça veut dire « avril » ?  
B : \_\_\_\_\_
2. A : Qu'est-ce que ça veut dire « s'il-vous-plaît » ?  
B : \_\_\_\_\_
3. A : \_\_\_\_\_  
B : Ça veut dire « フランス語 »  
ou « フランス人 ».

→ Vocabulaire utile

Bonjour !  
Au revoir !  
Répétez, s'il-vous-plaît.  
Encore une fois.  
Pardon ?  
Ça va ? — Ça va.  
Excusez-moi !

Qu'est-ce que ça veut dire « conversation » ? 「Conversation」はどういう意味ですか？

◎ → この課の単語

ah bon	ああ、そうですか
au revoir	さようなら
avril	4月
ça	これ・それ・あれ
ça va ?	大丈夫ですか・元気ですか
ça va.	大丈夫です・元気で
ça veut dire	～という意味です
ce mot	この言葉
classe, la	授業・クラス・教室
comment	どのように・どう～
conversation, une	会話
dans ce mot	この単語では
encore une fois	もう一度
excusez-moi	すみません【授業中、先生に話しかける時】
fiche de présence, la	出席表
français	フランス語の・フランスの
j'ai oublié	忘れました
je / j'	私
je ne sais pas	わかりません
mais	しかし・でも
merci	ありがとう（ございます）
on	私たちは・人々は
on ne prononce pas	発音しません
on prononce	発音します
ou	または
pardon ?	すみません？・何ですか？ 【繰り返してもらおう時】
qu'est-ce-que	何
répétez, s'il-vous-plaît	繰り返して下さい
s'il-vous-plaît	～下さい・お願いします 【授業中、先生に話しかける時】
utile	役に立つ
vocabulaire, le	語彙



→ 実用単語集

absence, l'	欠席
année, l'	学年
cours, le	授業
date, la	日付
département, le	学科
en japonais	日本語で
	学部
heure de classe, l'	授業時間
jour de classe, le	授業日
Madame	先生【女】
Monsieur	先生【男】
nom de famille, le	姓
numéro d'étudiant, le	学生番号
points, les	点数
prénom, le	名前
présence, la	出席
spécialité, la	専門、専攻
total, le	合計

→ 文法メモ

(質問の形については、「はじめに」参照)

	「…」は、どういう意味ですか？
くだけた会話	Ça veut dire <b>quoi</b> «...»? «...», ça veut dire <b>quoi</b> ?
普通の会話	<b>Qu'est-ce-que</b> ça veut dire «...»? «...», <b>qu'est-ce-que</b> ça veut dire ?
硬い会話・文章	<b>Que</b> veut-dire «...»?  この言葉は、どう発音しますか？
普通の会話	<b>Comment</b> on prononce ce mot ? <b>Comment est-ce-qu'</b> on prononce ce mot ?
硬い会話・文章	<b>Comment</b> prononce-t-on ce mot ?
S'il-vous-plaît	すみませんが、(教えてください)。  S'il-vous-plaît, comment on prononce ce mot ? Comment on prononce ce mot, s'il-vous-plaît ? すみません、この言葉はどう発音しますか？ S'il-vous-plaît ! (先生)、お願いします… Répétez, s'il-vous-plaît. 繰り返して下さい。

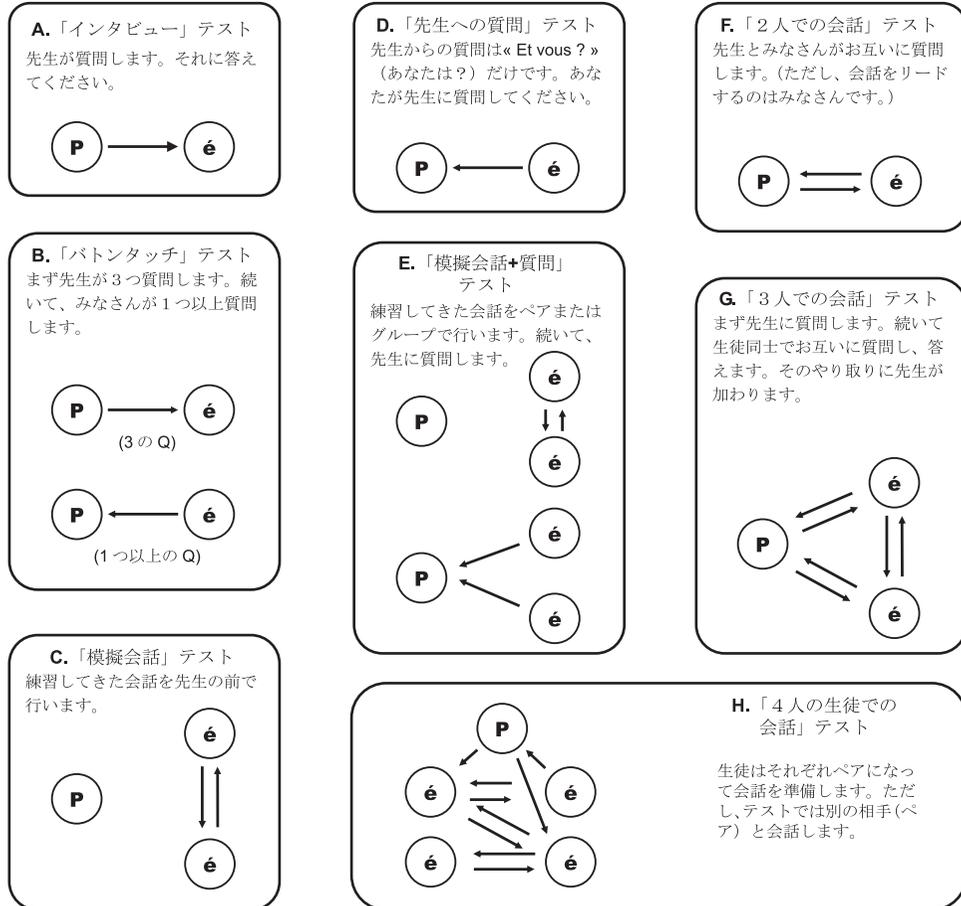
→ メタ・コミュニケーション：発音に関して

書かれた単語の発音の仕方がわからない時は、まずその単語を指で示しながら「これはどう発音するのですか？」(Comment on prononce ça?) と聞きましょう。それから「これはどういう意味ですか？」(Qu'est-ce que ça veut dire?) とその意味を尋ねましょう。

教師が発音したどれかひとつの単語や、いくつかのまとまった単語の意味がわからない時は、「\*\*\*はどういう意味ですか？」(Qu'est-ce que ça veut dire, XXX?) と尋ねましょう。この場合、わからない言葉を、質問する側が繰り返す必要があります。完璧に繰り返せなくても大丈夫ですが、教師側は質問者がわからなかった単語を特定できなければいけません。よく聞き取ることができなかった場合、教師にもう一度同じフレーズを繰り返してもらうために「すみません、もう一度お願いできますか？」(Pardon?) と言いましょう。

### 3.先生との会話の時間・会話テストについて

この時間は、最初のうちは少し緊張するかもしれませんが。最初は、先生の質問に答えられればそれで十分です。また、先生にいくつか質問できればさらにいいでしょう。難しくはありません。クラスメートと練習したことを、そのまま先生とやりとりすればいいのですから。この練習を繰り返していけば、フランス語での会話がどんどん自然なものになり、そうなれば話すことがますます楽しくなっていくでしょう。まずは、チャレンジしてみましょう。また、会話テストには様々なパターンがあります。以下の図を参考にしてください。



# Fiche de présence

	en japonais	en français ou en caractères latins	Photo
Jour et heure		_____, ____ <sup>e</sup> heure	
Nom de famille			
Prénom			
Numéro d'étudiant			
Faculté, département			
Année		__ <sup>e</sup> année	

この紙は毎回の授業と試験に必ず持って来てください。  
**Apportez cette feuille à chaque cours SVP**  
 この紙を絶対になくさないでください。  
**Ne la perdez pas**

Commentaires

	Date	Présence <small>(Une absence = - __ points)</small>	Conversation	Commentaires
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				

TOTAL :    — / —                      — / —                      TOTAL GÉNÉRAL :                      — / 100